

# 1000万回の手洗いプロジェクト

中国が多民族国家であることはよく知られている。最大の人口を有しているのが漢民族とよばれる人々で、日本でもよく知られている西蔵(チベット)族やウイグル族など55の民族が少数民族とされている。その55の少数民族のうち25の少数民族が独自の歴史と文化を継承しながら雲南省に共存している。雲南省は中国の中で少数民族が最も多く住んでいる省である。

在もなお「物物交換」が行われていた。昆明市から直線距離で500キロたらずの場所である。経済成長が急速に進む中で、否応なく貨幣経済に組み込まれつつある地方農村部は、貨幣を持ってないが故に貧困状況に追い込まれているとも言えるようだ。

11月22日(月)

少数民族の多くは山間僻地に暮らし、そこは現代中国の経済発展から取り残された貧困地域でもある。貨幣経済の圏外におかれた農村では、年間収入が日本円で6000円にも満たない農家が数多く存在する。概して人口の多い都市部に隣接した農村地帯は経済的にも豊かになりつつあるようだが、都市部から遠ざかるほど自給自足に近い状況にあるようだ。かつて偶然通り合わせた思茅(シーマオ)市景東(ジャンドン)県のある山村では、毎月、日を決めた巡回定期市が行われ、近隣の農民が野菜や牛、豚、鶏を荷車に積んでやってきて、互いに売り買いをしていた。そこでは現

私が特命昆明支部長を拝命している認定特定非営利活動法人・日本雲南聯誼協会は、雲南省の少数民族の子供たちに教育支援を行っている。そのいちばんの柱は『50の小学校プロジェクト』とよばれるもので、25の少数民族が住む山間僻地に50の小学校校舎・寄宿舎・シャワー室などを建設することを目標としている。現在22校の建設が完了している。

二番目の柱は『25の小さな夢基金』である。成績優秀で進学を希望しながらも、経済的な理由から高等教育を受けられない少数民族の女子生徒に奨学金を援助するものである。昨年、その一期

生が昆明女子中学校春蕾クラスを無事に卒業し、大学あるいは職業学校へ進学し、それぞれの夢の一部を実現した。

三番目の柱が『1000万回の手洗いプロジェクト』である。少数民族の子供たちを保健衛生の面から支援するこのプロジェクトは、『OHA(独立行政法人国際協力機構)の「草の根技術協力事業」との協働事業として2年前にスタート。いくつかの試験を乗り越え大きな成果を残して、今年12月に完了する。完了にあたってこのプロジェクトの責任者である薄田栄光氏(OHA公衆衛生専門家)がプロジェクトの対象校を再度訪問するのに合わせて、建水県の白雲小学校に同行した。

白雲小学校はこの9月に『壁新聞プロジェクト』で山梨県小菅小学校の生徒さんが書いてくれた壁新聞を届けた学校でもある。昆明市内からバスを乗り継いでおよそ5時間。学校に到着すると校長先生が熱烈歓迎してくれた。「手洗いプロジェクト」では積極的な参加校で、薄田氏と校長先生を

はじめ先生方とは強い信頼関係ができてきたように感じられた。

到着早々、このプロジェクトで導入された手洗い場や太陽熱温水発生装置、トイレの状態を確認。いずれも使用に差し障りがある程の大きな問題はなかったが、手洗い場の流しのタイルが一部破損していた。「形ある物の宿命」だろうか。

その後、5年生の教室を訪ね、薄田氏が直接子供たちにくつかの質問をした。44名の生徒の中で自宅にシャワーを備えている家は10軒で、そのうちの半数近くが数日置きのシャワー使用だった。「手洗い」の実行はすべての子供が食前、トイレ使用後には必ず行っていることがわかった。プロジェクトを通して先生方に覚えてもらった指導方法が功を奏しているようだ。子供たちの反応を見ていて、手洗いははじめとする衛生意識が確実に子供たちの生活習慣として定着し始めていることを感じた。夜、校長先生以下主立った先生とこのプロジェクトの成果について意見交換。学校側は引き続いての支援を望んでいた。

11月23日(火)

早朝、校長先生の先導で建水県教育局の戴雲華副局長を訪問し、薄田氏がこのプロジェクトの結

果と成果を報告。戴副局長からはプロジェクトに対する感謝の言葉とともに、建水県民53万人の8割が農民で県の財政は豊かでない、建水県の教育予算に制限がある、中央政府から財政援助があるが新校舎建設・トイレ改修・寄宿生徒の多い学校のシャワー設置などを優先せざるを得ない状況である。しかしながら、このプロジェクトの報告から子供たちの意識と行動の変化があることを十分に読み取ることができ、衛生教育の効果を認識した。白雲小学校の事例から「大きなことはできなくとも、小さなことはできること」を学んだ。予算の制限はあるが手洗い場・シャワー室の設置に力を入れて行きたい。今後、資金の援助でなくとも、教師への教育、村民への教育などソフト面での支援をお願いしたい、とのことであった。「今の中国にしては珍しい」と言ったら失礼かもしれないが、副局長という高位にある人とは思えぬくらいの姿勢の低さと節度を充分にわきまえた戴副局長の人柄に好感を覚えた。薄田氏もプロジェクトの終了を目前にして感慨深いものがあったのではないだろうか。お疲れ様でした。

帰路のバスの中、「大きなことはできなくとも小さなことはできる」という戴副局長の言葉を反芻していた。



【上】5年生の子供たちに「手洗い教育」後の実践について質問する薄田氏(左は校長先生、右は昆明事務所の林さん)。手洗い実践率が100%というのは生徒の多少の“見栄”を割り引いたとしてもかなりの普及率だろう。【中】薄田氏の質問と説明に真剣に聞き入る5年生の女子。【下】9月、『壁新聞プロジェクト』で小菅小学校のみなさんが書いてくれた新聞を届けた。東京から奈良県、大阪市、そして大阪市の帆船「あこがれ」に乗って上海を経由して白雲小学校へ。数多くのボランティアのみなさんの熱意と協力の賜物である。戴副局長のことは、「大きなことはできなくとも小さなことはできる」そのものではないだろうか。その一部に参加できたことを私自身が喜んでいる。

## もう一人の国際協力

雲南師範大学の外語学院に日本語学科がある。7年前に開講したばかりのまだ新しい学科だが、現在120名程の学生が学んでいるのである。その日本語学科の「老師」つまり先生の一人が、JICA(独立行政法人・国際協力機構)から海外青年協力隊の一員として派遣され、『100万回の手洗いプロジェクト』の

研修会開催にも協力していただいた松野志歩さんである。

松野さんはさいたま市(大宮)の出身。大学卒業後、テレビ番組制作会社に6年間勤務したが、体調を崩したことを切っ掛けに退職。治療しながら自分の「行くべき道」を模索した。もともと「ことば」に興味があったこと、そして「教師になりたい」という思いが膨らんだこともあって、一念発起して日本語教師養成課程を履修して資格を取得。海外で教える経験は日本語教師として大きな財産になるとのアドバイスもあって、JICAの海外青年協力隊に応募した。

現在、雲南師範大学の呈貢(チャンゴン)校舎で週4日、90分授業を7コマ受け持っている。中国人学生は「とても真面目」だそうである。松野さんは学生に「視野をひろげてほしい」と願っている。「日本人イコール真面目で親切」というステロタイプの返事が返ってくるそうで、情報をさまざまな角度から見る習慣を身につけさせたいと指導している。講師という立場柄、卒業後の進路指導に深く関われないのが残念だとも。雲南省では日本語を十分に活かす仕事が少ないことや上海・北京などの大都市に運良く求人を見つけたとしても低賃金で生活そのものが困難な状況もあるとのことだ。教師をしていて嬉しいことは「ありがとう」という反応が返ってきたときと学生がやる気になったときだという。

海外青年協力隊員としての任期は2011年10月で満了する。その後のことは未定だそうだが、雲南の魅力に後ろ髪を引かれている部分もあるようだ。元気で頑張ってください!



雲南師範大学本校キャンパスにて